

<Note> Information : An Emerging Dimension of Institutional Analysis : A Study of William H. Melody's View

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内田, 成 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1009

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



情報：制度分析の新次元

ウィリアム・H・メロディの所説の検討を中心にして

Information : An Emerging Dimension of Institutional Analysis

A Study of William H .Melody's View

内 田 成

UCHIDA, Minoru

はじめに

すでによく知られているように、近年において社会経済はインターネットテクノロジーの進化に代表されるデジタル革命とグローバル化との結合により大きく変化してきつつある。一般にはこのような変化はオールドエコノミーとニューエコノミー（デジタルエコノミー）という視点から論じられることが多い。そしてこのような変化は情報および情報産業をベースに考えて行くことを必要としている。⁽¹⁾

これまでの経済学はデジタルエコノミー出現以前の経済をベースにした仮説と前提に基づいており、いわゆるパラダイムの転換を受けてその再定義や領域の拡大がもたられつつある。本稿で私はウィリアム・H・メロディの「情報：制度分析の新次元」を採り挙げてみることにした。⁽²⁾メロディは情報およびコミュニケーションという問題に制度主義的⁽³⁾な視点からアプローチしている。特にメロディは新しい情報とコミュニケーションテクノロジーがどのように現在の経済制度の構造

を根本的に変化させるか吟味しているし、経済の新しく急速に成長しつつある分野での「情報市場」の発展の多様性についても吟味している。また、主要な経済理論と情報およびコミュニケーションとの関連についても言及している。

従って、メロディのアプローチは情報およびコミュニケーションと経済学の関連を考える上での分析のひとつの糸口を与えるものであると同時に現代における制度的アプローチの有効性を明らかにする一つの材料となると考えた。

メロディの基本的な視点

メロディも指摘しているように、社会の機能はその社会の構成員間の情報とその効果的なコミュニケーションに依存している。情報およびそのコミュニケーションの手段は基本的かつ広範囲にわたりその影響をあらゆる制度に及ぼす。情報およびコミュニケーションのシステムの経済的な特徴は発生した情報の性質および使用され解釈されている性質に影響を与える、といえる。

キーワード：制度派、情報、コミュニケーション、デジタル、進化

Key words : Institutional Economics, Information, Communication, Digital, Evolution

したがって「広い意味で、どんな社会においても社会的、文化的、政治的および経済的な制度は、それらの制度の中にある共有されている情報の特徴により定義される。より狭い経済的な意味では、恐らく何らかの経済、産業、生産過程あるいは家計の経済的な効率を決定している最も重要な源泉である。情報の特徴はすべての社会的および経済のプロセスの根底にある知識の状態を決定していることである。それらは社会的現実の解釈を体系化している基礎を与えている」⁽⁴⁾

ちょうど空気が人間の身体の機能の研究にとって中核的であるのと同様に情報は経済システムの機能の研究にとって中核的なものである。それにも関わらず、経済思想の歴史を通じて情報には殆んど直接的な関心を向けられていない。空気と同様に、一般に情報は絶対に本質的なものであり、コストもかからず、普及しているにもかかわらず特別関心を払われていない。

次にメロディは新古典派経済学と制度派経済学とについて次のように述べている。「新古典派の理論では、『完全な情報』あるいは『完全な知識』という基本的な仮定があるので、すぐに重要な経済的な問題の分析に進むことができる。制度派経済学者は情報の問題を当然のこととして決めてかからないし、経済的な問題の説明の一部としての情報の不完全さに必要に応じて関心をもつ。しかし、彼らでさえ、経済的および社会制度の進化によって社会における情報構造の重要性により深い関心をもつことは滅多にない。社会における経済的および政治的制度の構造は重大な情報の問題を作り出していることは明らかである。しかし、それにもかかわらず、情報の構造とその他の制度的特徴との間の関連について、あ

るいは情報構造の変化がいかに特定の制度の発生と崩壊に影響を与えているかについては殆んど知られていない。」⁽⁵⁾

情報と制度

制度についてウォルトン・ハミルトンは「ある集団の諸習慣、もしくはある民族の諸習慣として定着している多少なりとも支配的かつ永続的な思考または行為の仕方。……諸制度は人間存在の諸活動の範囲を固定し、それらの活動を型にはめるものなのである」⁽⁶⁾と定義しているし、ヴェブレンは「大多数の人々に共通する思考習慣が恒久化されたもの」⁽⁷⁾と定義している。制度は集団内あるいは正式な組織で活動している諸個人の間での相互作用のパターンを反映している。相互作用のパターンは慣習、法律、組織的な役割あるいはその他の行動への指針によって決定される。ある制度を維持しているのは相互作用のパターンである。また相互作用のパターンにおける変化が制度内の諸変化をもたらす。この相互作用の本質は情報のコミュニケーションである。

メロディは「すべての制度の定義と構造の双方は情報の状態によって重大な影響を受ける。制度は情報を共有したいという欲望の発達から生ずる。それによって相互作用のパターンが育成される。……経済的な分析にとって同様に重要なことは、制度が意思決定をするためにその他の制度や諸個人により使われている外的環境のための情報を生む、という事実である。社会におけるいかなる特定の情動的構造にとっても、いかにその社会が機能しているかということに影響をあたえる関連した情報構造が存在する、ということである。いくつかの制度的構造は、その他より

もより多くの情報の創造と拡散のために伝導力のある条件と発端とを与える。情報の構造と質とは同様に制度的な構造における変化の結果として変化する。もしも制度的な変化が望まれているとしたら、必須条件としてあるいは効果的な制度的変化の本質的な局面として情報構造を変化させることが必要である。」⁽⁸⁾

したがって、情報およびコミュニケーションの構造に影響を与える要素は、すべての制度の研究にとって中核的であり、しばしば経済制度に関して支配的である、といえる。

ところで、経済的分析にとって情報はさまざまな視点から見ることができる。ひとつは全体的な環境的な条件として、である。つまり経済的意思決定のための制度的なバックグラウンドを与える一般的に描写される情報である。もうひとつのものは、永続的な価値を持ち人々の記憶に蓄積されるものもある。本、映画、コンピュータのテープやその他の方法においてである。社会的な見地から情報の蓄積は知識の全体のストックを表している。それは科学やテクノロジーにおける改善、芸術や文学の発展、労働や社会についての理解の改善、およびその他の方法の結果として増加する。

この視点からテクノロジーはすべての知識のストックにおいて蓄積された情報の特定の応用の一例である。新しい技術的加工品は単に知識の状態から引き出された特定の一組の情報の物理的な具体化を表しているに過ぎない。

情報のコンセプトの最も重要な適用は社会における知識の長期的な蓄積と拡散という点に関して、である。また、それは制度の社会的、政治的および文化的な側面に経済的な問題を関連づける共通の根拠を与える。情報は

しばしば社会的、政治的および文化的な分析の構成要素である、と考えられる。

経済思想の進化と情報

次にメロディは、経済思想史における「情報」について触れている。

「アダム・スミス、カール・マルクスおよび古典派経済学者たちは、主として動的な経済システムにおける長期的な資本蓄積および社会への含意について関心をもっていた。情報の概念は分析のための焦点として使われることはめったに無かったけれども、経済制度および経済成長への情報システムおよびコミュニケーションシステムの含意についてはしばしば認識していた。」⁽⁹⁾

たとえばスミスは分業が市場の大きさによりいかに限定されるかについての古典的な説明の中で市場の大きさを決定する極めて重要な要素としてコミュニケーションシステムの影響を述べている。すなわち、水路によって水を陸路で運ぶことによるのみ与えられるよりもより広範囲に及ぶ市場があらゆる産業に対して開かれるようになったように、あらゆる種類の産業が自然に細分化され、改善されるのは沿岸においてであるし航行可能の河川の兩岸である。

その経済発展についての分析においてスミスは、学習過程を通じての知識の拡散が発展の基礎であることを認識していた。特定の技術の発展は分業にとって本質的なものである。この情報の仮定は労働の生産力の増大および資本蓄積を刺激する。

また、メロディによれば、マルクスは資本主義の進化におけるコミュニケーションシステムの役割についてしばしば論及している。彼はしばしばコミュニケーション手段の改善

が、異なった場所の労働者間の競争を促進し、ローカルな競争がナショナルなものに変化する、という事実に関心を払っている。マルクスは情報それ自体における市場の発展を予告していた。⁽¹⁰⁾

さらにメロディは新古典派、制度派およびシュムペーターらの考え方を次のように要約している。まず新古典派について「新古典派は、その分析的装置を精緻化するさいに『完全な情報』あるいは『完全な知識』の仮定をおいた。それによって静的分析の基準を制限し、長期的な資本蓄積および時間を超えての経済成長という根本的な動的問題および情報の変化、テクノロジーおよび制度という条件は単に考察から排除された。」⁽¹¹⁾と述べている。

さらに制度派経済学とケインジアンについて「制度派経済学者と大部分のケインジアンはスミス、マルクスおよび古典派経済学者の伝統の中で進んできた。彼らは経済における情報およびコミュニケーションの問題が制度的な構造の重要な側面であると認識される分析的枠組みのなかでの経済の長期的な発展を吟味した。不完全な情報はケインジアンの分析の統合的な部分を形成している。・・・ケインジアンの分析は、しばしば意思決定者が現実に分析における重要な要因として依存している現実の世界の情報という欠陥を考えている。」⁽¹²⁾

またシュムペーターについては「シュムペーターは資本主義の長期的な原動力について、経済的、社会的および政治的制度的変化をもたらし主要な影響力としてテクノロジーの変化のもつ「創造的破壊」に焦点を合わせた。シュムペーターは現在の進化におけるイノベーションおよび拡散の過程を説明に向けられた研究分野の拡大を生んだ。そこにおい

ては情報の拡散が重要な役割を演じていた。このことはイノベーションや新しいテクノロジーのイノベーションを刺激する新しい知識の蓄積を促進する科学およびテクノロジー政策の研究を導いた。シュムペーターの研究は制度派経済学とはしばしば関連付けられなかったけれども、同様な理論的枠組みの中で作用している。」⁽¹³⁾

たとえば、ヴェブレンは消費者選好が情報環境により学習され条件づけられるということ強調したし、供給条件が主として技術的变化のもっている制度的な含意により決定される、ということも強調した。ヴェブレンは制度的経済分析のためのその全体的な分析的枠組みを確立する際に、需給双方に適用された情報に関する新古典派理論の基本的な仮定を拒否した。この一般的な全体的な分析的枠組みの中で社会の制度的構造内に蓄積され共有された情報は、需給の状況についての主要な決定要因となると考えた。

また、ジョン・R・コモンズは分析を政府の規制を通じての制度的改革まで包含した。すなわち、「個人的行動の制約、解放および拡大における集団行動である」とした。彼は直接多くの社会的改革の企画や苦労してそれらの改革の基礎となる本質的な経験的な情報を収集することには関わったけれども、実際にその制度的分析における主要な要素として情報の状態に直接焦点を合わせることはなかった。⁽¹⁴⁾

社会における不平等を説明するものとして情報不足が挙げられるけれども、現代の多くの制度主義者にとって社会における情報構造は、その研究の主要な問題ではない。

メロディは、ここでハロルド・イニスを採り挙げる。というのも、イニス（Harold

A. Innis, 1984-1952) は制度的分析に基づき社会科学への進化論的経済学、情報およびコミュニケーションの完全な統合を目指した数少ない経済学者である、と考えられたからである。

彼の研究は大きく3つに分けることができる。1920年代はカナダの経済史についてであった。次いで彼は機械化されたコミュニケーションの発展の影響について着手した。印刷、出版およびラジオによるマスコミュニケーションから始めた。最終的に彼は研究領域を文明の発展におけるコミュニケーションの歴史の研究にまで広げた。彼は拡大しつつある「絶対的な支配権」(empires) を持っている特にコミュニケーションシステムの役割に焦点を絞った。彼はどんな社会でもコミュニケーションメディアが社会的組織の形態に非常に影響を与え、それにより個人的組織のパターンにも影響を与えるということを主張した。⁽¹⁵⁾

彼のコミュニケーション理論は二つの主題に分けられる。すなわち印刷されたものや言葉により伝えられる時間に結びついているメディアとラジオ、テレビや新聞などのように空間に結びついているメディアである。『絶対的な支配権とコミュニケーションとコミュニケーションの偏り』という著書においもイニス、同様な視点から考察を加えている。

どんなコミュニケーションメディアも時間の拡張あるいは地理的な空間の拡張に関するコントロールを容認する傾向において「偏っている」(biased) という。彼はコミュニケーションシステムおよび情報システムは古代文明においては羊皮紙、粘土、および石といった耐久性があったり輸送しにくいものが使われていた、という。これらの特徴は時を経て

伝えられるが空間を超えてではない。これらのシステムは時間的にバイアスを持っている (time biased) 。紙は軽くて耐久性はないが合理的な時間で輸送しやすい。⁽¹⁶⁾

文化的な観点では、時間にバイアスをもつメディアは慣習、連続性、共同体、歴史的、宗教的および道徳的を強調する伝統的な社会と結びついている。時間にバイアスをもつコミュニケーションシステムは、豊かなオーラルコミュニケーションと豊かな洗練されたライティングテクノロジーをもつ社会に見出すことができる。そこではアクセスがわずかな特権を持つ人々に限定されている。

これに対して印刷、電話、ラジオおよびテレビという近代のメディアという空間にバイアス (space biased) をもつコミュニケーションおよびインフォメーションシステムは、現在および将来に対する方向性をもっており、絶対的な支配権の拡大および政治的権威の増大、長い年月にわたる制度の創造および科学や技術的知識の成長に対する方向性をもってしている。それらは非常に効率的である情報交換およびマスコミュニケーションのシステムの確立により特徴付けられているが、オーラルな伝統のもっている豊かさ、多様性および柔軟性を移行することはできない。

イニスは経済制度とコミュニケーションおよび情報システムの間的高度な相互依存を認識している点で同時代人のなかではユニークな存在である。彼はコミュニケーションのパターンと情報のフローが経済発展にとって中核的なものである、と述べている。⁽¹⁷⁾

彼はコミュニケーションテクノロジーが経済システムにおける大部分のその他のテクノロジーに対する障壁を形成する、と主張する。それと同時に彼は経済的誘因と市場の諸力が

コミュニケーションパターンや情報のフローに強力な影響を与える、ということも認識していた。それはどんな現実的なコミュニケーションおよび経済発展の分析においても無視できないものである。

近年において、経済学とコミュニケーションおよび情報制度との交差（インターセクション）を直接研究している経済学者は非常に多くはないが、ハーバート・I・シラーおよびダラス・W・シムズをあげることができる。シラーは新しい情報およびコミュニケーションテクノロジーとして展開し始めている社会制度における進化論的变化について多くの論文を著している。彼は情報およびコミュニケーション制度の変化と経済および政治的発展の間の関連を吟味してきた。またシムズはコミュニケーションの経済学研究のパイオニアだが、消費者選好を創造し条件づける際のマスメディアの役割に特に関心を払ってきたし、あらゆる種類の経済理論に対するその重要性を吟味してきた。⁽¹⁸⁾

情報と市場

制度的分析において情報のコンセプトは区別されておらず、独立しておらず、経済概念と並んでいる。むしろそれは、制度主義者により用いられた大部分の経済的概念の統合的な部分となっている。情報は「テクノロジー」「消費者選好」といったすでに見てきたように重要な概念を含んでいる。

このことは経済分析における最も重要な概念のひとつである「市場」に言及することによって説明できる。市場の一般的な定義は売手と買手の間の交換機会の規定である。交換なしに、あるいは取引なしには市場は存在しない。この全体として非常に単純化された分

析、新古典派理論の典型は市場のいくつかの表面的な特徴および計算の方法に焦点を合わせているが、市場の制度的基礎や市場の多くの重要な構造的局面を無視している。そのすべてが究極的な市場交換にとっての根拠を作る本質的なものである。⁽¹⁹⁾

交換は商品やサービスが取引される場合にのみ起こり得る。取引は所有権を必要とする。すなわち、取引される商品において強く主張しうる所有権である。取引される商品における財産権の固有な特徴は過去数世紀にわたり非常に変化してきたし、異なった諸国間で、また、諸国内の地域により今日でも変化してきている。交換される非常に多くの商品やサービスは、そのために彼あるいは彼女がどんなに満足しようとも、その財産の所有者に対してすべての自由を伴うことはない。地域の規制、生産物安全基準および文化的規範は取引条件に関する何らかの制限を説明する。

コモンズは市場交換の概念をより深く吟味し、市場交換を統計的加工品よりもむしろ社会的関連として扱うことによってより豊かなものにした。彼は社会的関連を単なる交換というよりもむしろ「取引」(transaction)と定義した。⁽²⁰⁾それによって抽象的な実在よりも交換に関係している現実世界の意味を重要な事柄として捉えた。関係しているものは「ゴーイング・コンサーン」であり、一組の「ワーキングルール」に従って所有権の交換に従事している。ワーキングルールは他人との取引において、市民に対して権利と義務からなるシステムを細かく記している。コモンズの研究の大部分は「取引」の本質と決定因子についての詳細な情報を収集することに向けられていた。次に経済的な問題はワーキングルールと所有権に埋め込まれた権利と義務の

基礎となっている構造を変化させるための法的なあるいはその他の手段をとることによって扱われる。コモンズは表面的敵な徴候よりもむしろ市場の制度的基礎を研究していた。⁽²¹⁾

コモンズの分析は、もしもコモンズがより多くの関心を情動的次元に払ったならば豊かなものとなったかもしれない。というのも、新古典派の「交換」概念とコモンズの「取引」概念の持つ情動的側面の相違点が重要であるからである。情報が市場「交換」と結びついている新古典派理論は本質的に価格情報に限定されている。市場「取引」は、すぐには役に立たないより多くの情報を含むし、それゆえに交換概念によって認識されていない。

ここでメロディはハイエクの所説を採り挙げる。⁽²²⁾ハイエクは1945年のゼミナールの論文「社会における知識の利用」において、市場の優位について事例を挙げている。その内容は、人々の計画が基づいている知識はそれらに対してコミュニケーションする様々な方法は経済プロセスを説明するどんな理論にとっても決定的に重要な問題である、というものであった。すべての人々の間に散らばっている知識を利用する最善の方法はすくなくとも経済政策あるいは効率的な経済システムを企画する場合の主要な問題の一つである。

ハイエクのいう最も効率的なシステムとは「より完全な利用は既存の知識から成り立っている、ということのをわれわれが予期し得るという問題に主として依存している。」必要とされる知識は個々の売手と買手の特定の環境に関して詳細かつ体系的ではない。価格システムの長所は、たえず変化する環境の下で日々意思決定する無数の個々の売手と買手を反映しているすべてのこれらの詳細な非体系的な情報を捉え、コミュニケーションする

メカニズムである」ということである。

ハイエクは個人の選択、選考、環境およびかれら自身の最善の利害を極大化するための能力について個々の売手と買手に関しては完全な知識を仮定している。彼は個々の売手や買手がその他すべての売手や買手について、ハイエクが提示した問題は、つまり、諸個人が経済における資源を配分するために自分自身の環境を最も効率的にする「完全情報」をいかに使うかということであった。しかし、ハイエクが主張する市場に対する優位さは完全競争市場という状況に対してのみ適応できる。市場が不完全な場合、諸個人は彼ら自身の利害にもっとも役立つ十分な情報を持つことがない。

さらに独立した原子主義の意思決定の仮説は真空状態においてなされる個々の選好に基づいており、経済におけるその他の諸個人、制度および発展により影響されないハイエクの仮説は中心的な計画に帰属する同じ情報の複雑性の問題により無効になることから彼の市場代替性を必然的に遠ざけている。さらにハイエクは社会的制度に対する一般的な機能である非価格情報を調整するという問題を取扱っていない。また彼はある環境下で集団的意思決定が個人的意思決定の合計よりもすべての個人にとってより良い結果を生むという可能性を考慮していない。ハイエクは明らかに資源配分の最も効率的なシステムとしての市場の優位性を証明していない。ハイエクは市場価格を通じてのあるタイプの情報を調整する優位性を協調する問題の一つの側面に関心を払ってきた。

しかしハイエクの本当の貢献は制度的な構造における情報役割と特徴に関する長期的な経済的論争における議論に焦点を当てたこと

である。この問題の決定的に重要な側面は、しばしば殆んど無視されている、ということである。⁽²³⁾

また、ウィリアムソンについては、彼はその取引費用の概念をコモンズから引き出したということおよびその分析が「新しい制度派経済学」を代表しているということを主張しているけれども、そのコンセプトは市場取引が自由ではない（伝統的な新古典派理論の仮説である）ということの認識以上のなものでもない。彼の理論はいかなる経験的な検証もしないし、公的計画対私的計画の相対的なメリットについても論じない、とかなり否定であるが⁽²⁴⁾彼の論拠はテクノロジーが進んだ経済における市場取引の情報およびコミュニケーションの特徴についての仮説に基づいている。この問題の情報およびコミュニケーションの側面は制度派経済学からの関心を確かに必要としている。

情報社会における情報のいくつかの特徴

メロディは近年の経済社会の趨勢について次のようにいう。「社会は工業的資本主義から情報に基づく経済へ移行しつつあるといえる。事実詳細な調査は確かに社会が常に情報に基づいてきた、ということを示している。最も原始的な部族にいて口伝は豊かな情報である。近年におけるさまざまな変化が主として市場における情報の特徴に現れている。まず第一に徹底的に削減された単価での情報を生み、加工し、移転させるテクノロジーは情報を供給する能力における大躍進をもたらした。第二に現実の経済市場においては多くの種類の情報が非常に高い交換市場価もっていたが、これまで公的な市場システムを通じて

供給されてこなかった、ということがわかった。有益でなかったために過去において探求されていない多くの新しい種類の情報に対する研究をすることが今や有益となった。以前は市場の外にあり、経済活動には含まれなかった情報が今や市場に引き込まれてきている。」⁽²⁵⁾

情報市場の急速な発生はコンピュータとテレコミュニケーションテクノロジーにおける進歩の相互作用により可能となった。コンピュータ産業の進歩はだんだんと発生するデータのコストを減少させることによって市場の厳しい限界を押しつけてきた。テレコミュニケーションの進歩はグローバルマーケットを取巻く広範囲にわたる地理的限界を押しつけた。しかしながら情報が生じ処理され、それが及ぶインフラストラクチャーを与える新しいテクノロジー設備システムの持っている経済的含意とその設備システムにより与えられる内容である情報サービスそれ自身とを区別することは重要である。

狭い経済的意味においてコンピュータシステム設備、衛星、光ファイバーケーブル、ターミナルなどは、その他の生産あるいは製造過程ほど生産過程としては何ら異なっていない。システム設備に重要性を与えるのは情報サービスが与えられるからである。それゆえにシステム設備の効率は与えられる情報サービスの効率に影響を与える重要な要因である。効率的な設備システムを持っている国家は大部分の情報サービスが交錯するグローバルな情報市場での競争において主要な優位性を得るだろう。⁽²⁶⁾

ひとたび情報が発生すると、それを複製するコストは最初にそれを生んだコストよりもはるかに低い。一人のユーザーによる情報の

消費は、その他の殆んどすべての資源や製品の場合に生ずるようにそれを破壊しない。残った情報はその他のひとによって消費される。唯一の追加コストは同一の情報をもたらすことに関連している。また、浸透が一定の水準に到達すると増殖効果が多くタイプの情報に関して作用し始める。それゆえに、知識のストックに付加されるコストは非常に大きいけれども、社会からその他の社会への情報の拡散において一般的に非常に重要な経済が存在する。この相対的にローコストの情報の複製の経済的特徴の含意は、たとえば知識の拡大のような、ある状況においては非常に有益であるが、特定の問題やその他の状況下での困難さを創造する。⁽²⁷⁾

メロディによれば「工業的および商業的生産過程にインプットされる源泉として重要な情報の大部分は、ある企業の製品の購買者の行動、ある企業のその他の資源サプライヤー、競合他社、政府の規制等の「内的」知識を与えようとする専門的な情報である。一般的にひとたびそのような情報がすべての利害ある関係者に知られるようになると、その経済的価値は徹底的に消えてしまう。」⁽²⁸⁾

限定された顧客の私的消費のための専門的な情報サービスは毎日生まれている。それらは多国籍企業集団に関する国際市場の詳細についての調査研究から特定の消費者、競合者、労働組合、あるいは特別な取引のための政府の調整局の交渉力の強さについての信頼できる評価にまで及んでいる。

したがって、このような情報のローコストの複製 普通もっとも手近なコピー機を使うコスト および相対的な情報を盗むことの容易さ、それは情報の物理的な除去を必要としないから、そのような情報の価値は極端なセ

キュリティーなしには非常に希薄である。社会を通じての知識の拡散を促進する同じ情報の複製の経済は多くの種類の特定の知識のもっている経済的価値を急速に破壊することを導く。⁽²⁹⁾

最終消費者生産物としての情報

最終的な消費者生産物としての情報の特徴は、どのタイプの情報が望まれているのか、どんなユーザーにより、どんな目的のためにか、によって変わる。現在進行中の恐らく情報市場の最大の潜在的な発展は限定されたデータに対してである。メロディによれば、それは大きく分けて3つのタイプに分けられる。すなわち「(1)例えば、買物選択をするさいの意思決定を促進する(2)例えば、銀行のような特定の活動の仕事をより効率的にする、さらに(3)たとえば、ビデオゲームのような娯楽の新しい形態を提供するといったことである。特定のデータバンク、コンピュータプログラムおよび進歩したテレコミュニケーションの結合は私的消費のための特定の情報に市場を通じてアクセスすることを個人に可能にする。そのようなシステムの促進および拡張という活動のための経済的誘引は非常に大きく、すでに確立されたシステムに対して購読者を追加する単価を劇的に減少させる。」⁽³⁰⁾

また新しいテクノロジーは特定のユーザーのための詳細な個人情報の特定のデータバンクの創造を可能にする。多くの場合、もしも情報へのアクセスが限定されていたならば、この情報の市場価値は大きい。多くの政府はすでに情報市場の進歩が人々の個人的生活の詳細に入ってくることを制限するため、またクレジット、医療および税金のファイルのよ

うなある種のでデータバンクへアクセスする条件を規制するための手段を講じている。

もっとも普及しているテレビによって説明される大衆娯楽市場はいくらか異なった特徴を帯びている。情報複製経済は非常に実在的である。すでに作成されたプログラム情報をコピーするコストはわずかである。そして少数の視聴者よりも多くの視聴者に役立つことによりコストは非常に小さくなる。衛星によって、より多くの場所へ送信する追加的費用は受信ターミナルのコストを減少させる。新しいテレコミュニケーションテクノロジーにより現存する情報をコピーする経済は次第に巨大になりつつある。さらに大衆娯楽情報の市場価値は、この情報へのアクセスを制限することにはではなくて、それを促進することに基づいている。時々存在する制限は市場の範囲を制限するためよりも、むしろ自由裁量価格を通じて利益を極大化するための手段である。⁽³¹⁾

大衆あるいは大量情報の特定の形であるニュースは大衆娯楽と非常に類似した経済的特徴をもっている。主な違いは大部分のニュースの経済的価値のもっている時間的感覚と大部分のニュースが新聞やテレビ局のようなディストリビューターに対してニュースエージェンシーによる中立的な生産物として販売されている、という事実である。

メロディによれば情報市場は二つのカテゴリーに分けることができる。「(a)最大の市場価値が最大の情報の分散によって達成される。(b)最大の市場価値が主として情報の希少性を価値あるものにし、特定の情報の独占を求める特定のユーザーへの情報提供によって達成される。」⁽³²⁾前者は主として大量消費のために大衆に与える情報に代表され、娯楽テレビ

が挙げられる。後者は対抗関係にある利害者に関して価値のある差別的な知識を与える特定の情報の発生により代表される。オリジナルな情報を生み出すコストの増加および以前からあるすでに低いレベルの情報を複製するコストの減少に伴い、地球的な基準で現存する情報の市場を拡大するための経済的誘因は増加している。市場がある情報の独占の創造に基づいている第二のカテゴリーは情報を複製する低いコストによりあまり影響を受けない。

商品として情報についてメロディは次のように言う「商品としての情報は非常に微妙である(tenuous)、情報の品質は本質的に変化する。また、品質管理は不可能である。確かに受け取る情報が正しい正確なものであるかどうか前もって知ることは不可能である。もしも知ることができたならば、その情報を買うことはないだろう。多くのタイプの情報は入手後にさえその品質を評価することは不可能である。市場性のある商品としての情報の固有の特徴のため不注意に集められた、偽りの、誤解を招くような、偏った情報の持っているリスクは増大する。商品として情報を取巻く市場の拡大は誤った情報の陰に隠れた市場もオープンする。意思決定者にとって価値のあるきちんとして情報が多くなればなるほど、ひどい誤った情報も多くなりうる。」⁽³³⁾

最後にメロディは公共政策問題に触れている。彼によれば、多くの個人や組織は情報およびコミュニケーションセクターの急速な拡大から本質的に便益を得ることができるが、すくなくともあるものは相対的および絶対的な見地から不利益である。大量利用者に必要とされる大量の新しい情報サービスをより効率的にするISDNの技術水準まで電話システ

ムはアップグレードする。しかし、少量利用者やローカル電話サービスのみを必要とするユーザーにとってはより高価となるかもしれない。⁽³⁴⁾

さらに「情報市場の特徴は発展途上国へのコンピュータおよびテレコミュニケーションテクノロジーの移転に関連した特別の問題を生む。市場の誘因は国内および国際的な情報サービスのコミュニケーションの双方のためのインフラを確立するために発展途上国に新しいテクノロジー設備・システムを販売することである。テクノロジーが進んだ諸国において確立している情報の基礎を与えれば、また、新しい情報サービスを確立することを主導すれば、情報のフローは予測できる。しばしば広告を伴うテレビ番組のような最終的な消費者情報は先進国から発展途上国へと普及しがちである。情報の独占の結果として価値を創造する専門的な情報市場は、発展途上国についての支配的な情報のフローを先進国や多国籍企業にもたらしがちである。情報市場のこれらの状況は専門の情報にアクセスしてきた組織による経済財やサービスの全領域に関して発展途上国市場への浸透を促進する。」⁽³⁵⁾ 公共政策に主要な問題は、情報およびコミュニケーションセクターの発展が社会における階級分割を悪化させないということおよびそのベネフィットがあらゆる階級間に広がる、ということを確認する方法を見出すことである。これは「公益」およびパブリック・サービスについての新しい概念および操作的定義、社会政策の要求の新たな解釈および効果的な手段のための新しい制度的構造のデザインを必要とする、といえよう。

これまでの要約としてメロディは次のように言う。「情報の概念は、あらゆる種類の経

済問題にとって、また経済理論にとって中核的である。大部分の状況で情報の問題は公式には認識されていない。というものそれらがより身近な経済的概念の統合的な部分として埋め込まれているからである。世界を通じて今や実行されつつある情報およびコミュニケーションにおける急速な改良は、社会の経済的、政治的、社会的および文化的制度における根本的な変革の前兆となっている。機械化された情報およびコミュニケーションの重要性の増大およびそれらが可能にするグローバルマーケットは、あらゆる思想を持つ経済学者により注意深く理論の情報という次元を吟味せざるを得なくする。」⁽³⁶⁾

メロディの所説の検討

これまで見てきたようにメロディは情報およびコミュニケーションについて、現代および将来における情報およびコミュニケーションというものがこれまでそれほど意識されずに殆んど検討の対象あるいは理論の中心におかれてこなかったことを指摘する。そしてこれまでの主要な経済学の諸学派の考え方を検討にすることによりその前提・仮説を検証し、その限界を指摘してきた。そしてヴェブレンら制度派経済学の方法論に今後の可能性を見出している。というのも、社会的、文化的、経済的な制度の中には共有されている情報の特徴が反映されている、と考えられるからである。また情報の特徴は、すべての社会的および経済的なプロセスの根底にある知識の状態を決定しているといえるからでもある。ヴェブレンが関心を抱いたものは、消費者嗜好や市場制度の形式的な性質ではなくて、むしろ経済行動に影響を及ぼす「支配的な思考習慣」すなわち「制度」に他ならなかった。

従って情報やコミュニケーションを分析するうえで、ヴェブレンらの制度的なアプローチは有効性を持っていると考えることができる。

しかしメロディの所説に全く問題がないわけではない。たとえば「制度派経済学者と大部分のケインジアンはスミス、マルクスおよび古典派経済学者の伝統の中で進んできた」というが、制度派経済学者特に創始者のヴェブレンは従来の経済諸学派の批判的検討を通じて独自の経済学を構築していったことはよく知られており、⁽³⁷⁾この点においてメロディの指摘は正しくない。また、制度を問題にしながらヴェブレンの独自の制度論に対する言及が殆んど全くないことも納得できない。また制度学派の建設者の一人であり、ヴェブレンの弟子であるミッチェル（W. C. Mitchell）にも全く言及していない点も同様である。

今後経済のデジタル化が進むにつれて情報およびコミュニケーションの問題は今まで以上に重要性を増してくると思われるが、メロディが指摘しているように制度派的なアプローチの重要性および有効性を明らかにするためには、回り道であるかもしれないが一度ヴェブレンにまで遡り「制度派経済学とは何か？」また「制度主義的アプローチとは何か？」を明らかにすることが急務といえよう。

(1) たとえば、マーケティングの領域においても同様なことが指摘できる。フィリップ・コトラー、ディバック・C・ジェイン、スヴィート・マイシンシー著、訳者有賀裕子、解説恩蔵直人『コトラー新・マーケティング原論』翔泳社、2002年7月9日初版第1刷発行。

(2) William H. Melody “Information : An Emerging Dimension of Institutional Analysis”, Evolution-

ary Economics Volume Foundation of Institutional Thought, edited by Mark R. Too(New York : M. E. Sharpe, INC) 1988,pp361-387.

メロディの最近の研究としては次のようなものがある。“Designing Utility Regulation for 21st Century Markets”, in E. Miller and W. Samuelson, ed., *The Institutionalist Approach to Public Utility Regulation*. Michigan State University Press (2002). *The Triumph and Tragedy of Human Capital: Foundation Resource for the Global Knowledge Economy*. Delft University Press (2002)

(3) わが国における制度派経済学に関する最近の業績としては次のものが挙げられる。宇沢弘文著『ヴェブレン』岩波書店、2000年11月28日第1刷発行。佐々野謙治著『ヴェブレンと制度派経済学 - 制度派経済学の復権を求めて』ナカニシヤ出版、2003年10月20日初版第1刷発行。および高 哲男著『現代アメリカ経済思想の起源』名古屋大学出版会、2004年2月20日初版第1刷発行。

(4) Melody, *op. cit.*, p.361.

(5) *Ibid.*, p.362.

(6) Walton H. Hamilton, “Institution” Encyclopaedia of the Social Science, ed by E. R. A. Seligman and A. Johnson, vol.8, pp84-89.

(7) Thorstein B. Veblen, *The Place of Science in Modern Civilisation and Other Essays* (New York : Huebush) 1919,p.239. またミロウスキーは「社会的に構築された普遍的なものである」と制度を見做している。(G.M.ホジソン著 若森章孝、小池渺、森岡孝二訳、『経済学とユートピア 社会経済システムの制度主義的分析』ミネルバ書房、2004年1月30日初版第1刷発行、181ページ)。

(8) Melody, *op.cit.*, pp363-364.

(9) *Ibid.*, p.366.

(10) *Ibid.*, p.367.

(11) *Ibid.*, p.367.

(12) *Ibid.*, p.368.

(13) *Ibid.*, pp.368-369. シュンペーターと制度派経済学（進化論的経済学）の関係については、たとえば、次の文献を参照されたい。ジェフリー・M・

- ホジソン著、西部忠監訳、森岡真史・田中英明・吉川英治・江頭進訳『進化と経済学【経済学に生命を取り戻す】』の10章「ジョセフ・シュンペーターと進化過程」(213-232ページ)、およびリチャード T.ギル著安井琢磨 熊谷尚夫監修、久保芳和訳『現代経済学叢書 経済学史』昭和53年6月30日第14刷発行、98-106ページを参照されたい。
- (14) Melody, *op.cit.*, p.369. コモンズについては伊藤文雄著『コモンズ研究 産業民主主義への道』同文館出版株式会社、昭和53年5月31日3版発行を参照されたい。
- (15) *Ibid.*, p.370. イニスの著作の主なものとしては次のものがある。 *A History of Canadian Pacific Railway*(1932) *The Fur Trade in Canada: An Introduction to Canadian Economic History* (1930) *Political Economy in Modern States*(1946) *Empire and Communication*(1950) *The Bias of Communication*(1951) *The Strategy of Culture*(1952) *Essays in Canadian Economic History*(1956)
- (16) *Ibid.*, p.371.
- (17) *Ibid.*, p.371.
- (18) *Ibid.*, p.372.
- (19) *Ibid.*, p.372. たとえば坂井素思は、その著『産業社会と消費社会の現代 = 貨幣経済と不確実な社会変動 =』の中で市場の特徴について次のように述べている「第一に、市場では価格メカニズムが形成される特徴がある・・・第二に市場の調整メカニズムは、需要者間の競争と供給者間の競争の上に成り立っているという特徴がある・・・第三に、市場制度の特徴としてもうひとつ注目すべきなのは、情報の在り方として分権的であるということである。」財団法人放送大学教育振興会、2003年3月20日第1刷、80-81ページ。
- (20) 取引費用とは交換を交渉し、測定し、執行する費用といえるが、新古典派経済理論では取引の過程で費用がかからないと仮定している。ロナルド・コースは1960年に発表した論文の中でコースの定理を表した。(Ronald H. Coase, "The Problem of Social Cost." *Journal of Law and Economics*, vol.3, October 1960, p.15.) この定理は取引費用がゼロの世界では効率的な結果が常に成立するということである。また、このコースの定理は経済における制度の役割に直接関係している。この点については、ティモシー・J・イエーガー著、青山繁訳『新制度派経済学入門・・・制度・移行経済・経済開発・・・』東洋経済新報社、2001年3月27日発行、33-44ページを参考にした。
- (21) Melody, *op.cit.*, p.373.
- (22) *Ibid.*, pp.374-375. ハイエクの基本的な考え方については次の文献を参照されたい。トニー・ローソン著、八木紀一郎訳『経済学と実在』日本評論社、2003年10月10日第1版第1刷発行、151 - 170ページ。
- (23) Melody, *op.cit.*, p.377.
- (24) *Ibid.*, p.377.
- (25) *Ibid.*, pp.377-378.
- (26) *Ibid.*, p.378.
- (27) *Ibid.*, p.379.
- (28) *Ibid.*, p.379.
- (29) *Ibid.*, pp.379-380.
- (30) *Ibid.*, p.380.
- (31) *Ibid.*, pp.380-381
- (32) *Ibid.*, p.381.
- (33) *Ibid.*, pp.382-383.
- (34) *Ibid.*, p.383.
- (35) *Ibid.*, p.384.
- (36) *Ibid.*, pp.384-385.
- (37) ヴェブレンの正統派経済学およびマルクス経済学についての見解は小原敬士著『ヴェブレンの社会経済思想』岩波書店、昭和41年3月25日第1刷発行、78-125ページ。松尾博著『ヴェブレンの人と思想』ミネルヴァ書房、昭和41年6月29日第1刷発行、81-124ページ。中山大著『ヴェブレンの思想体系』ミネルヴァ書房、1974年5月20日第1刷発行、117-240ページ。などを参照されたい。また経済思想と制度派経済学に関しては、田中敏弘著『アメリカ経済学史研究 新古典派と制度学派を中心に』晃洋書房、1993年11月10日初版第1刷発行および『アメリカの経済思想 建国期から現代まで』名古屋大学出版会、2002年2月25日初版第1刷発行が有益である。